

インドネシアにおける安全対策の実態と実践

—子どもたちが安心して海外で暮らすために—

前在インドネシア日本国大使館付属バンドン日本人学校 教諭
千葉県千葉市立犢橋小学校 教諭 中村年男

キーワード：安全対策、危機管理、避難訓練

1. はじめに

治安が不安視される地域でいかに安全に暮らしていくか、子どもが安心して学習に臨める環境づくりとして学校にできる対策を追求することが、日本人学校では求められることを実感することから、現地で行っている対策を参考にしつつ、本校における安全対策をどのように行っていけばよいかを3年間安全主任として取り組んできたことを紹介したい。

2. インドネシアを取り巻く安全事情

(1) 自然災害

2004年12月にスマトラ島沖を震源とするマグニチュード9.1の大地震が発生、同地域ではその後も断続的に地震が発生している。

(2) テロ関係

2002年10月のバリ島爆弾テロ事件以降に大規模な自爆テロ事件が4年連続して発生、以後2009年7月、ジャカルタ市内のホテル2箇所において同時爆弾テロが発生し、外国人6名を含む9名が死亡、多数の負傷者がでた。最近では2016年1月14日、ジャカルタ中央部でテロ事件が発生したことは記憶に新しい。国家警察によるテロ関係者の取締りが進められているが、今なお、テロへの警戒は必要である。

(3) 日本人に求められる安全対策

一般的に日本人は経済的に裕福であると見られがちであり、窃盗や強盗等の一般犯罪のほか、テロ、誘拐等の標的にされる可能性があることを十分に認識する必要がある。また、日常生活を送る中で、常に安全のための三原則（「目立たない」、「行動を予知されない」、「用心を怠らない」）を念頭に行動することも大切である。

3. 本校の子どもたちの現状

インドネシア・バンドン日本人学校は小学部11名、中学部6名、幼稚園3名（2016年4月1日現在）の児童、生徒、園児が通っている非常に小規模校である。本校に通う子どもたちの多くは、セキュリティが整った邸宅・マンションに住み、登下校は自家用車で送り迎えをするという形で行っており、公道を歩くことなく家庭と学校を行き来できている。海外生活ということもあり、子ども達は家に帰っても外で遊ぶことができず、日本の子どもたちのような生活は難しい。

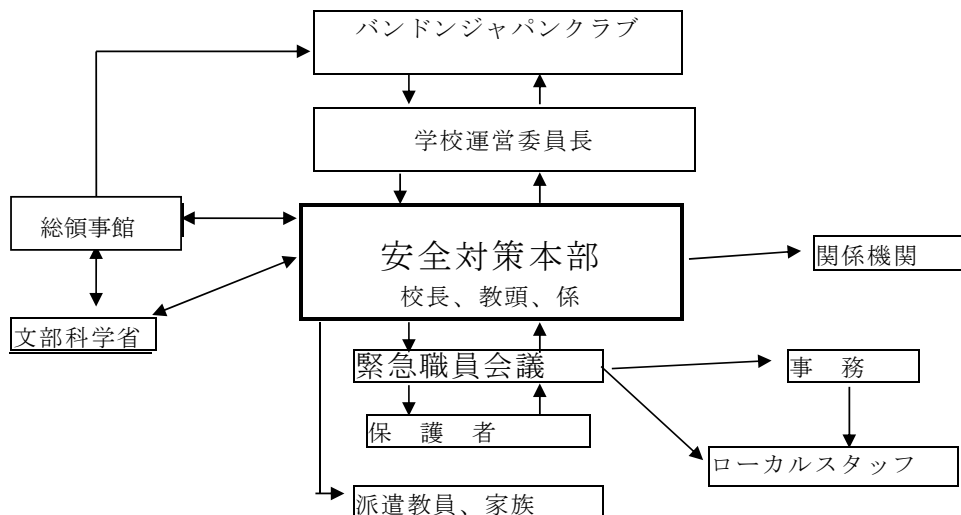
また、保護者も学校生活に対する安全確保は関心が高く、大使館から入ってきたテロ、デモの情報、現地の洪水情報についてもいち早く情報を確保し、速やかに各家庭に連絡できる体制が整っている。そのため校外活動を行う際にも、移動手段や活動内容、解散場所、指導体制を保護者に説明することが常に求められている。

4. 本校の取り組み

(1) 安全計画について

本校は年度初めに安全計画を立て、年間を通して火災・地震・風水害・暴動その他の非常事態に際して、児童生徒および学校職員の生命・身体の安全を確保しあわせて学校施設・設備の保全を図ることを目的として行われる。内容は、組織や具体的対応について書かれており、様々な非常事態に対する対応について記載されている。

※緊急事態連絡系統図



(2) 避難訓練の実施

本校は年3回避難訓練を行っている。訓練項目は不審者・火災・地震・暴動発生を想定している。特に暴動時には学校自体が標的となり、安全が確保されなくなった時のために第2次避難場所が設定されている。訓練を繰り返すことで保護者に対してもいざという時に迅速に対応できる体制づくりを行っている。また、子ども達にも何が起こるかいつも想定して自分の命を守るためにどのように行動すべきか考えるようにさせている。



避難訓練の様子

(3) IDカードについて

本校では来校者に関する安全規則があり、来校舎にはIDカードの携帯が義務付けられている。保護者、運転手、使用人も含め家族の関係者に対し用意されている。

◎IDカードとそのチェックについて

- ・校内において、教職員はIDカードを身につける。
- ・保護者も学校敷地内においてはIDカードを身につける。
- ・来校者は必ず校門入口でサップム（警備員）のチェックを受けないと入校できない。
- ・学校行事（運動会・学習発表会）の場合は、別に受付を設けてチェックを行う。

5. 現地校の安全対策

バンドンの現地校「ステアブディ校」に視察に行き、そこで、現地ではどのようにして安全対策をしているのか着目し、安全に対してどのような対策を講じているのか、見学、インタビューをさせてもらった。

(1) 外部からの対策について

インドネシアの学校は総じて言えることだが、日本のように門が閉められるということではなく、常に入れる状態になっている。しかし、サップム（警備員）は必ずついており、いざという時には対応できる形をとっている。一方子どもの帰宅時間になると、学校の入り口は親と子どもたちで入り乱れ、正直不審者が侵入したとしても把握しきれないと思われる。学校の職員に聞いてみると、特に避難訓練というものなく、今まで不審者による侵入で混乱したことはないということだった。日本の場合であるといざという時のために訓練をしているものだが、インドネシア国内ではそのような危機意識は日本より薄いと感じた。

(2) 学校内の対策について

「非常時の際にはどのように子どもたちに情報を伝えるのか」という質問に対して、全体に伝わる放送機器があるので、それを使って伝え1か所に集めるということだった。また、けがの際には救急箱が常備されており、速やかに対応ができるような設備が整っていた。また、学校の敷地の周りには高い塀で敷き詰められており、外部からの侵入をさせない建物となっているので、このような体制でも十分なのだと感じた。「安全マニュアルはあるのか」という質問に対しては、そういうものは現時点で作成



緊急時に使う放送器具

しておらず、非常時には保護者にメールで一斉送信して伝えられる体制が整っており、この連絡手段に関しては、行事のお知らせ等で日ごろから活用しているとのことで、連絡系統はしっかりしていることがわかった。

(3) まとめ

現地校を見学する前は、世界的な治安の状況からインドネシアは安全管理についてある程度対策がとられているものと思っていたが、実情は日本よりも意識は薄いと感じた。その背景には、警備については警備員に任せればよいという考えがあり、また現状として被害が少ないため、必要と感じていないからではないかと考えられる。ニュースではイスラムの国ということでテロやデモに対するイメージが強いが、それはどちらかという海外に住んでいる邦人に対するものなのかもしれない。今回の見学を通して、日本人学校の危機管理、安全意識の高さを改めて認識する機会となった。

6. おわりに

インドネシアは世界的には治安面で不安視される国である。私たちがそのような国で暮らすということは日本で生活する以上に様々な面を想定し、自分の身を守れるようにしなければならない。

本校と現地の学校を比較することで安全に対する意識の違いを理解することで、私たちが求める安全対策を現地のスタッフにも理解してもらうことが大切であると感じた。本校の取り組みでは、特にIDカードの提示について警備・来校者に徹底させていくことで、学校の警備体制をより強固にすることに努めた。

日本人学校という特殊な環境の中で、100%国内と同じ体制ができない状況の中、いかに子どもたちの安全を確保し、安心して学習に臨めるかが私たちの使命の一つであると考えている。私自身、安全主任として3年間携わってきたが、避難訓練の在り方や職員・子ども・保護者の意識をいかに高くもってもらうかを念頭に努めてきた。海外における安全対策では、不測の事態に対してどのように事前準備をしているか、そして国内の情勢をいち早

くつかみ、迅速に対応できるかが重要である。日本においてもこの海外での経験を生かし、安全対策に対し何が事前準備で必要か、またどんな目的で行うのか、常に危機管理意識を高く持ち、非常時に迅速に対応できる学校づくりに励んでいきたいと思う。